

にんにくのさび病(新発生)

令和3年6月に、石狩と上川地方のにんにくほ場で、にんにくの葉に橙色のやや盛り上がった小斑点を生じる症状が確認された。この小斑点はやがて表皮が破れ胞子が認められた。小斑点(夏胞子堆)は初期病斑では垂球形、進展した病斑では紡錘形で、黄色から黄褐色であった。夏胞子は球形から楕円形の単胞で、大きさは $21.3\sim 29.0\times 26.6\sim 38.4\mu\text{m}$ 、壁は無色だが黄橙色の内容物を持ち、表面には細刺を有していた。夏胞子の発芽率は $5\sim 20^{\circ}\text{C}$ で73~93%と良好であったが、 25°C では18~28%、 30°C では発芽が認められなかった。一部ほ場では、夏胞子堆の周縁部に黒色の冬胞子堆が観察された。冬胞子は1または2室で、前者は垂球形から倒卵形、大きさは $16.3\sim 25.2\times 23.5\sim 39.1\mu\text{m}$ 、後者は隔壁部でくびれ、楕円形から倒卵形、大きさは $17.9\sim 34.1\times 24.9\sim 52.1\mu\text{m}$ であり、いずれも表面は平滑で、先端部に厚い壁を有していた。以上の形態および生態的特徴から、病原菌を *Puccinia allii* (de Candolle) Rudolphi、本病をニンニクさび病と同定した。道内では本病原菌によるねぎとたまねぎのさび病の発生が既に確認されているが、にんにくでは報告が無かった。

(上川農試・石狩農業改良普及センター本所・上川農業改良普及センター富良野支所)



にんにくのさび病(上川農試 佐々木 原図)